

---

# アクロ・キュープ

雨時時雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アクロ・キュープ

### 【Zコード】

Z9315S

### 【作者名】

雨時時雨

### 【あらすじ】

白髪美少女のアクロ。

ナイフを全身に仕込み、愉快な仲間と共に世界を旅する！

そして、アクロの正体とは・・・

## 1 偽善者の国（前書き）

「アクロってさあ、なんでそんなに、運動神経いいわけ？」  
幼さの残る少年の声が、アクロと言う少女に、問いかけた。  
少年の声は、透き通ったボーカルトだった。  
それを例えるならば。

晴れ渡つた、雲一つない空の、青の様な声。

「それはね、シェン、そう成らざるを得なかつたからだよ」  
アクロと呼ばれた少女は抑揚なく、シェンと言つ少年にそう答えた。  
鈴鳴るような声は感情が無かつた。

それは、例えるならば。

カップの中の、冷めてしまつた紅茶の様な声。

「なんだよそれ」シェンは不思議そうにアクロに言つた。  
「何なんだろうね、ボクにもよく、分からぬ」  
アクロは曖昧<sup>あいまい</sup>にそう言つた。

# 1 偽善者の国

果てしない荒野に、野太いエンジン音が響く。乾いた大地に、焼け付く日差しが落ちている。

ワインレッドに塗りつぶされたオープンカーには、四人の、人間が乗っていた。

男2人に、女2人。

「アクロちゃん、何処まで行くんです？」

金髪の美女は、助手席に座っている、老婆のような白髪を持つ少女に問いかけた。

アクロ・キュープは貪る様に食べていたクッキーの缶から皿を離さず、美女に言った。

「後もう少しですよ、ベルガモットさん」

「タメ口でいいって言つてんですよ？」

美しい金髪を揺らし、董色の瞳を輝かせながら、ジャスミン・ベルガモットはそう言った。

アクロは『寒くなってきた』と言ひながらホールドを首元まで留め、またクッキーに皿を戻した。

ジャスミンは楽しそうだ。

「何が目印なんだ？」

後部席の少年が、目の前のアクロに身を乗り出し、問いかけた。

「でつかい櫻おりだって」

アクロはクッキーを口の中でのじ、もじもじさせながら言った。

「櫻？」

「うん、櫻、黒い櫻なんだって、一種の國らしいけど、ショーンは樂しみ？」

墨すみのような黒髪に、空を映した海のような青色の瞳を持つ少年、シンは首を傾げた。

ショーンの過去には、いろんな事情があつたため、苗字は無い。

「楽しみかはわかんねえよ、行つてみねえことにはさ」

「ボクは楽しみだよ？君見たいな、お馬鹿さんとは違つてさ」

「つんだと！」

シェンが瞳をギラつかせた時、隣にいた大柄な男がシェンの肩を握つた。

「やめる、シェン、嬢ちゃんには適わねえって」

「うるせえ！放せよハイド！」

褐色の肌に、若葉の様な色の瞳に、獨特の黄緑色をした、短かい髪の大男、ハイド・アクソンは、かははと乾いた笑をこぼし、シェンの首元を猫の様に持ち上げ、席にきちんと座らせてから、手を離した。

シェンは眉間に皺を寄せ、音を立てながら激しく貧乏振りを始めた。

「底が抜けるからやめてよ、シェン」

「黙れえつ！」

アクロの物言いに、苛立たしげに叫んだシェンは、貧乏振りを一層激しくさせた、その時。

「あつ！あれ、檻つて？」

「えつ？」「はつ？」

ジャスミンは、片手でハンドルを握りながら反対の手で前方を指差した。

そこには巨大な黒い檻、檻の中には大きな建造物が並んでいる。

「建物、建つてるんですね」

「人間が動物みたいですねえ」

「超でけえ！」

「かはは、牢獄みたいだな」

それぞれの感想を口にし、黒い檻の入り口に車をつけた。

「ようこそ、旅人さま御一行殿」

入口の両脇に大きな獣。

左側に巨大な鷲が、右側に巨大な鷲が、人語で話しかけてきた。

「・・・・・」

4人は呆気にとられ、ぽかんと口を開けている。

「おつと、失礼いたしました、私達の国の動物、獸は人語じごが話せる者も居ます、私達は門番でござります。」

鷺の方が4人に向かつて話しかけた。

「・・・へえ、そうなんですか」

アクロはクッキーの缶をコートの中に仕舞うと、車を降りた。

「あの、車は・・・」

「入国しても、使用していただいてかまいません、ですが、銃やナイフの所持は許可しておりません」

鷺がそう言った。

「そうですか、じゃあ、ショーン、ハイドさん、ベルガモットさんも、降りてください。」

ジャスミンとハイドは返事をしながら、車を降りた。

シェンはまだむすくれたままだったが、無言でゆっくりと車から降りた。

アクロはコートの内側を探り、三本のナイフを取り出して、鷺の方に渡した。

鷺は丁寧ていねいにナイフを受け取った。

「ナイフは出国の際にお返しいたしますゆえ。ご安心ください。」

「そうですか、分かりました。」

アクロは抑揚無くそう言った。

# 1 偽善者の國（後書き）

一氣に投稿しますよ〜 ウウ

## 2 紅い願い

ブローバンク

オープニングカーのエンジン音が、激しく響いた。

アクロは白髪を隠すため、赤い大きなコートに付いている、フードをすっぽりと被っていた、白髪を見ると道行く人々が、<sup>きい</sup>奇異の視線を向けてくるので、気分が悪いのだとアクロは言つ。

途中何人もの人間に食事やお茶は譲れられたが、万ヶ口は全て黙っていた。

モード

「あの、旅人さん」

と長い赤毛を二つに結んだ病弱そこの女性が、アグロは気弱そ  
うな顔を向けて、そう言った。

旅人さん 一緒に食事しながら お詫びさせてくれませんか? 女性は必死な形相でそう、アクロに問いかけた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「二二のかば、れいわせでのれどれと歎へとこて」

シンはアクロに倒れた。

アクリは女性に言った。

女性は田を真ん丸くして驚いたが嬉しそうな顔をした。

「はい、もうなんですね、あまり大きな声では言えないんですけど…」

「ええ、そうなんですね」

女性はコクコク頷いた。

\*

\*

アクロは赤いカーペットの敷かれた、ホテルの一室に、ジャスミンと、あの女性と居た。

ハイドとショーンは別室で食事を楽しんでいた。

アクロ達の居る部屋にはテーブルクロスの敷かれたテーブルの上には沢山の豪華な料理が並んでいた。

アクロはフードをすっぽりと被つたまま、分厚い肉を、上品に小さく切つて食べていた、ジャスマリンはワインを飲んでいた。

「好きなだけ食べてください」と女性に言われてから、今までずっと食べ続けている。

あれだけクッキーや、ペロペロキヤンティーを食べたのに、まだ食べている。

「アクロちゃん、それ位にしといたほうがいいですよ、太るよですか？」

ジャスマリンが嗜めると、アクロは露骨に残念そうな顔をしてから。

「デザートがまだだよ？」

と、言つた。

アクロの前に座つている女性は楽しそうにフフッと笑つと、近くにあつた電話で、デザートのルームサービスを取つた。

「デザートを食べながら、お話したしましょ、その前に、貴方達の中に『紅蓮龍』<sup>くれんりゅう</sup>と言つ肩書きを持つものはいらっしゃいますか？」「・・・『紅蓮龍』はボクですよ・・・ゼニアさん」

彼女はゼニアと名乗つた。

ゼニアは運ばれてきたケーキやムースをアクロとジャスマリンの前に運ばせ、自分は小さなタルトにフォークを刺した。

ゼニアは、アクロが『紅蓮龍』だと知ると、とても驚いた風だったが、淡々（たんたん）と続けた。

アクロは田の前のショートケーキの苺を突き刺し、口に運んだ。

甘酸っぱい、なんとも言えない味が口いっぱいに広がる。

「率直に言わせていただきますと、この国の王、つまり統率者である人物にあることをお願いして欲しいんです。」

ゼニアはタイミングを見計らい、話し始めた。

「実はこの前、私の夫が、重い病にかかつてしまつて。」

「そうですか・・・」

「はい、それで、夫の病氣を治すには、娘の・・・娘の臓器を使わなければならぬんです。」

「どうしてですか？」

「血縁者の臓器の方が、体に負担がかからないそうなんです。でも、他の人の臓器が、一致する可能性があるんですね！なのに・・・娘をどるか、夫を取るかの選択を、迫られているんです。ですから、王に他人の臓器でも、了承が得られれば、その臓器を使用してもいいという法律を作つていただきたいと頼んで欲しいんです。」

ゼニアは目尻に涙を溜めながら、俯いた。

暗い沈黙は少し続き、そして。

「・・・なるほど、では、その依頼、承りましょう。代償は高いですよ」

「なんでも用意いたしますわ」

「・・・綺麗なナイフと、携帯できるような甘味、あと、ガソリンを用意してください。それと、依頼を終了させるまでのホテル代、食事代などの支払いも、お願ひしたい。」

「それくらいでしたら、全然大丈夫ですわ、夫も娘も助かる可能性が増えるんですから、それくらい安いものですね！よろしくお願ひいたします。」

ゼニアは深々と頭を下げ、部屋から出て行つた。ドアの向こう側。ゼニアの顔には黒い笑顔があつた。

「完璧な演技ができましたわ・・・お父様・・・」

### 3 紅色の過去

「で、どうなんだよ」ショーンが憲劫そうに言った。

「どうあるつて、ですう、アクロちゃん」

ジャスミンはアクロの方を楽しそうに見ている。

「はあ、じゅあ、ジャスミンさんは王宮で近々あるイベントがないか調べて、あれば招待状を奪つてきてください。ショーンはボクと一緒に行動するか、ここで待つてる事、ハイドはショーンと同じ。」

「はいですう」

ハイドはシーカルに笑いながらベッドに胡坐をかけて座つたまま言った。ショーンは不服そうだったが何も言わなかつた。

「じゃあ行つて来るですよ？ アクロちゃん」

「はい、お願ひします、8時にまたここに集合で。」

「はいはいですう」

ジャスミンは、鼻歌でも歌いだしそうな雰囲気を、かもし出しながら、後ろ手に片手を振りながら、出て行つた。

「さあてど、ボクはこれから、買い物に行くんだけど、どうする？」アクロは部屋から出ようとしながらハイドとショーンの方を振り向いた。

「行く！」

ショーンは眉根の皺を深くしながら身を乗り出して言った。

「待つとくぜ、かはは」

ハイドは言つて、じろりとベッドに倒れた。

「・・・・・・・・」

アクロはそのまま部屋を出て行つた。ショーンが後ろをついていく。

暗い、青の闇が空を覆つていく。

フードの隙間から零れる、白い髪と白い肌が闇に映えた。

白い髪からは甘いシャンプレーの匂いが漂つ。

「あのや、『ひうじ』お前の髪つて白いわけ？生れ付き？つうか、アルビノ？」

ショーンは不思議そうに聞いた。

「・・・生れ付きじゃないよ、元は赤毛だつたんだ。」

ショーンは燃えるような赤毛を纏つたアクロを想像した。

火の女神のようだった。サラマンダー。

「じゃあ、どうして？」

ショーンは聞いた。白い髪と違い、黒い髪は闇に消えた。

「どうして・・・答えようと思えば答えられるかな・・・それはね、ひどいストレスと憎しみで脱色してしまつたんだよ。」

「お前が何かを憎むなんて珍しいな」

「そうかな」

「そううだよ」

「・・・まあ、ボクにも両親つてもんが居るからね、ひよつとした  
こぞいじさがあつたんだよ」

「こぞいじせねえ」

「そつ、こぞいじれ、こぞいじれ、その憎しみを晴らすために旅をして  
るんだけどね」

「憎しみを晴らす？」

「復讐ふくしゅうつて感じだよ」

「復讐があ、でもよ、誰に復讐ふくしゅうすんだ？」

「父だよ」

「親父かよ、なんでだよ」

「これ以上は教えられないよ、今日はちよつと喋り過ぎたかな。」

「なんだよそれ・・・何時かは教えろよ？オレ等の存在を許せよ

「・・・？ボクが君の存在を許してないって言つの？」

「許してねえだろ、分かり合つことは、許し合つ事だ、お前は何も  
分からせてくれねえから、オレもお前に分かつてもらおうと思えね  
え、てこつた」

「意味はよく分らないけど・・・悪かったよ、何時か話すから、今

はその時じゃないんだ。」

「おう、何時でもいいぜ、待つててやるよ」

ショーンは満面の笑みを、浮かべて言った。

「……………ありがとう」

アクロは照れくさそうにして、『一』のフードを深く被った。

フードの影から見えたアクロの表情は、年相応の照れた笑顔だった。

「…………へへへ」

ショーンは楽しそうに笑う。

「ちょっと、小耳に挟んだんだけど、ここ辺に良いうお店あるんだ

つて」

「へえ、探すか」

「もちろん」

アクロとショーンが並んで歩く。

闇に溶けた黒が、消えることの無い白を包んだ。

### 3 紅色の過去（後書き）

へいー！まだまだ続くぜ　ｗｗ

## 4 紅い剣と蒼い爪

「ここか？」

「たぶん……」

アクロ達の目の前には、怪しい雰囲気の店が一つ。  
ここは路地裏るじあいを行つたり来たりした末にたどり着いた店。

「入つてみるか」「うつ、うん……」

アクロはビクビクしながら、ションのシャツの裾すそをつまんだ。  
「なんだよ、怖いのかよ」

「こつ、怖い分けないだろお、ぜんつぜん平氣だよ。」

アクロはぶるぶると震えながら言つた、声が裏返ひらがえっている。

「はつ、しゃあねえなあ、シッカリ掴まつとけよ」

ションは前髪をかき上げながら、アクロの手を取つた。

アクロは手を振り払おうとしたが、力が強く離せなかつた。

「放せ」と言おうとしたがションがずんずんと言つてしまつたため、  
言えなかつた。

「すみませ～ん！」

ションが、店の人を呼び出そうと、声を張り上げた。

「くつくつくつく、そんなに大声を出さなくとも聞こえてるよオ、  
お譲じょうちゃんとお坊ぼうちゃん」

と、仄暗い店の奥から、語尾が高くなるような声が聞こえてきた。  
ぬつと目の前に現れたのは、紫色の髪を背中もぶくに下ろした、喪服の様  
な服装の男。

「くつくつくつく、來るのも分かつてたしイ、來たのも分かつてた  
ア、待つてたよオ」

言つと、男は厭らしい（いや）笑みを浮かべた。

「あの、ここ、ナイフを売つてゐるつて聞いたんですけど……」

アクロはビクビクと震えながら男に聞いた。

「くつくつ、あアアア、誰に聞いたんだい？まあいいやア、ちや

「んと、君のためにとつて置いたんだよオ？」

と言いながら男は、店の奥に行き、少しして戻つて來た。

「くつくつ、これこれエ、『血染ノ剣』<sup>ブラッディーベン</sup>つてやつらしいんだア、く

つくつくつく。

男は細長い箱をアクロに差し出した。

「んでエ、これがア、君のだよオ・・・何て言つかなア、えつとオ

『青い爪』？」

「ネーミングセンスがひでえよー！」

ショーンは叫んだ。

「嘘だよオ、『聖海ノ爪』<sup>マジンハヅ</sup>だよオ？」

男はうざつたくショーンに言つた。

「あ、あの、これいくらですか？」

アクロはたじたじと聞いた。

「くつくつくつ、あげるよお、君たちのために取つておいたんだ

ア、勝手に持つて行きなア、後オ、これもあげるよオ」

男は、深紅のフワフワとした服を、アクロに手渡した。

「これは？」

「あとあと必要になると思つからねエ、それもあげるよオ」

言つが早いが、男は店の奥にまた戻つてしまつた。

「・・・・・帰るか。」

「・・・・・うん。」

アクロ達はその場を立ち去つた。

4 紅い剣と蒼い爪（後書き）

つづづくうへ  
WW

## 5 紅いドレス

ホテルに着くと、一人は同時にボスンツと、ベッドに倒れこんだ。ハイドはソファーで寝こけていた。一人は「ぐうぐうしながら、あの男に渡されたものを眺めた。

アクロに渡された細長い箱の中からは、黒じやないかと思うほど深い深紅の、フエンシングで使うような刀身<sup>とうしん</sup>の細い剣。レイピア。バラの象られた鍔<sup>なが</sup>の部分も深い深紅だった。

シェンに渡された、小さな四角い箱からは、タンザナイトと言つ宝石を削つて造られた、透き通るような薄い青色の鉤爪<sup>くわづめ</sup>が一つ。エジ。

鋭くとがった爪の先が青い光を放つていた。

「おっ、結構得意なタイプの武器だ」

シェンは嬉しそうに言った。

「物を投げて攻撃かあ、野生だね」

「うつせえ、お前の何だよ」

「レイピアだよ、細い刀身の剣、主に突く攻撃、斬る事も出来るんだ。」

「お前が欲しかったのって、短剣、ナイフだろ？良いのかよ、そんなんで。」

「うん、まあ、追い返されるような形だつたし、この国ではこれだけでいいよ。あつ、でも、依頼完了のお礼にナイフを頼んだから、それを楽しみにしてくよ」

「ふう～ん」

「たつだいまあ、ですぅ！」

ジャスミンが、能天気な声を出しながら帰つて来た。

現在、えいと・おくる～つぐ

「どうでした？」

「ふう～ん 王宮で、明日、舞踏会があるらしいんですよお、

参加は自由らしいですぅ、だから招待状はなあ～し…」

「そうですか、分かりました、ありがとうございます。」

「いいえ、どうしたことないですよぉ、て言つたが、本職だし、情・

報・収・集

「本職つて?」

ショーンは不思議そうに聞いた。

「情報屋ですか？」

ジャスミンは蠱惑的に微笑んだ。

「情報屋つて?」

「情報を売る仕事だよ、お・馬・鹿・さん」

アクロが茶化す様に言った。

ショーンは拳をつくつて、振り上げるだけに留まつた。

「おやや？ アクロちゃん、それなにですか？」

ジャスミンは興味津々に、床に落ちている、男に渡された、服を眺めた。

「もしかして、アクロちゃんも、お洒落に用覚めたので「んなわけない！」・・・ですよね～」

アクロは台詞の途中に慌てて言つた、ジャスミンはがっかりしたようになつたが、服を拾い上げた。

「わあ～、モスリンたっぷり！ 可愛いですか～？ アクロちゃんにい、とっても似合つですよ～！」

ジャスミンはウットリとアクロと服を見ながらクルクルと回つていた。

「・・・・嫌な予感がする・・・

アクロはそう呟いた。

5 紅いドレス（後書き）

まだまだ行くぜえ♪ W W

## 6 紅ワイン

なつ、何でボクはこんな格好をシテイルンデショウカ・・・」「なんで、最後力タカナ発音なんですう、ふふ～ん、舞踏会に出席して、統率者さんに頼み事するんすよねえ？潜り込まなきやです よお」

ジャスマシンは楽しそうに言つた。

今はもう、舞踏会の始まる夜。

アクロはあの男に渡された服、モスリンたっぷりのミニドレスを着ていた。

腰の部分に巻かれている、大きな白いリボンの中に、ナイフが2本ずつ収納されていた。

白いレースに、深紅の生地、小さな深紅のシルクハットには白い大きなリボンが巻かれていた。

真っ白な髪はツインテールにされていて、首元が寒いとぼやいていた。

いつもの、シャツに短パン、コートのアクロからは想像もつかない姿である。

ジャスマシンはと言つと、瞳と同じ董色のカクテルドレスを身にまとつていた。綺麗な金髪に、董色のリボンを編みこんだ、凝つた三つ編みを一つのお団子状にしていた。

シェンはタキシード姿で、アクロに「緩んでる」と言われ、きつく結ばれたネクタイに苦しんでいた、前髪の右側を沢山のピンで留めていて、青い瞳がより大きく見えた。

ハイドは、綺麗なカツターシャツと黒いズボンだけだった。一言、行かないと言わてしまつたため、それ以上のことはできない。

ハイドは人間的にはありえないほどの怪力で、ドアノブを回そうとすれば、握りつぶし、コップを持とうとすれば、粉碎してしまうほどの力を持っているため、必要以上にあれこれ押し付けることはで

きないのだ。

「ええっとですねえ、刃物や銃器の持ち込み禁止、動物などとのご入場は禁止・・・だそうですよお?どうするんですう?」

「大丈夫ですよ、このレイピア、ドレスの中に隠せるし、ナイフも4本持つてます、料理も振る舞われるんでしょう?だつたら、ナイフやフォークは絶対出るはずでしょ?」

「確かにそうですねえ、絶対大丈夫ですね!」

ジャスミンは長い睫を伏せ、ワインクをした。

アクロは血染めの剣の入っていた箱の中から、皮製の鞘を見つけ、ドレスの中に隠れるように、太腿に取り付けた。

「分かんないです、大丈夫ですか!」

ジャスミンは言つた。

シェンは腰のベルトに聖海ノ鉤爪を飾りのように、お洒落に取り付けた。

「大丈夫ですよーアクセサリーにしか見えないですう」

ジャスミンは茶目っ氣たつぱりにまたワインクをした。

## 6 紅ワイン（後書き）

いくよ～  
WW

美しいワルツの旋律が流れる。

まつ白な大理石の床に、素敵なシャンテリアが光を、あちらこちらに反射させていた。

アクロたちは、舞踏会の会場に入る前に、一人の兵隊に会った、金髪の兵は物腰柔らかにお辞儀をした。参加者名簿の紙で指を切つたようだが、本人は気にしていないようだつた。

シェンは血の匂いにびくりと反応を示したが、平常心を装つていた。

赤毛の兵隊は、アクロ達の胸元に紅い薔薇の花を挿した。

会場に入ると、ザワザワとアクロに沢山の視線が集まる。その視線はアクロに、『奇異』の感情を向けていた。

白髪の少女。

なかなか居るものでは無い。一部の男性陣からの視線に、アクロは気持ち悪そうに背を向けた。

シェンが、何か行動をとるたびに、黄色い悲鳴が上がつた、シェンの顔立ちは、どこぞの貴族にでも見えるんじやないかと言つほど整つてゐる。シェンは色んな女性に踊らないかと誘われたが、ジャスミンがシェンに教えた魔法の言葉。

『連れがいるので』

で、全て断つた。

けしてアクロの顔立ちが整つていないわけでは無い、白髪の方が酷く目を引き、顔立ちなど目に入らないだけであつて、アクロの顔立ちはどこぞのご令嬢にも負けない美しさだつた。

筋の通つた鼻、真つ白な肌に桃色の頬、薔薇色の唇、整つた眉、美しい曲線を描く輪郭。

ただ、澁み沈んだ赤い瞳のせいでの雰囲気は高貴なものでは無く陰気なものになつていた。

アクロのこの容姿とあのひねくれた性格に惹かれるものは結構いる

もので、ジャスミンはその一人である。

白いテーブルクロスの掛けられた、長テーブルの上に並ぶご馳走達、  
だがナイフやフォークは無く、三又スプーンだけだった。

「凶器の制限が徹底されていますね・・・」

アクロはジャスミンに耳打ちした。

自分達の持つ武器は、レイピアと爪にナイフが4本だけ。  
バラの形をしたチョコレートを生クリームと共に、三又スプーンで  
つついていた。アクロの口元には生クリームが付いている。

「アクロちゃん、言葉遣いに気をつけてですぅ」

ジャスミンは、ハンカチで生クリームを拭い取りながら言った。

「分かつてますよ、ジャスミンさん」

コクンと大きく頷くと、お皿をジャスミンに渡し、ションの方へ小走りに向かった。

そして、

「ごめんなさい、待ちまして?」

と、いつものアクロからはありえない、猫撫で声で言った。

ションは首筋に鳥肌が立つのが分かった。掌に搔いた汗をズボンで拭い、アクロに手を差し出し、跪いた。

「いつ、いいや、待つてないよ、踊ろうか・・・」

「はい」

ションはジャスミンに言われたとおりに言った。アクロは猫被つた笑顔だった。

ションの周りを集っていた女達からは、悲鳴のような声が上がる。

アクロにはそんなもの全く関係なかつた。

あの男性陣からも残念そうな声が漏れたが、その後は、感嘆の声が響いた。

黒と白のコントラスト。赤と青の瞳の中に渦巻く光<sup>ライ</sup>

アクロの赤い瞳がチラリと見た先には、長い金髪を一つに結つた、豪華な服装の若い男が一人、統率者だ。

ションはアクロの細い腰に手を回し、アクロはションの背中に手を

回した。

音楽は緩やかに流れる、向かう先には、統率者が立っている。

アクロはしなやかな動きで、踊りを完璧に踊っていた。シェンは慣れないダンスに、アクロの足を多々踏んでいたが、アクロに踏むたびに脅され、だんだんと踏む回数は減つていった。

踊りながら、統率者の方へ移動していく。

アクロがくるりと軽やかに回るたびに、やわらかな白髪は流れるよう空を舞い、感嘆の声が上がった。

～～～～～？？～～～。

音楽が流れ続ける、だんだんと、シェンがダンスのステップに慣れてきた頃、音楽は唐突に終わった。

「ラブー！」

そう言つたのは、統率者だった。

「いやあ、可愛らしいワルツだつたね、お嬢さん、舞踏会慣れしている様だけど、舞踏会は何回目かな？」

「・・・五回目ですか、王・・・少しお話したいことがありますの。

」

アクロは造花の様な笑みを浮べ、ドレスの裾をつまんだ。

「レディ、飲み物をとつて来ます」

シェンは礼儀正しく統率者に向けてお辞儀をし、アクロに向かつて言った。アクロは小さくコクンと頷いた。

「そうか、五回目か、素晴らしいワルツだつたよ、私の名前はオレガノだあ、以後よろしく。ところで、話したい」ととは何かな？」

「重い病気を患つた時、臓器を入れ替えなくてはならない時があるでしょ？」

「ああ、あるねえ」

「それを、血縁者内では無く、事故にあって亡くなってしまったばかりの人の臓器でも、一致すれば使用してよいという風にして頂きたいんですが」

「うう～ん、そうだねえ・・・じゃあ、君の臓器を代わりに使えば

？」

そう言うが早いか、オレガノは胸元から銃を取り出し、アクロの額に触れるか触れないかの位置に止めた。

「オレガノ様、知っています？引き金を引くのに約0・48秒、弾に火がつくのに約0・02秒、弾丸が筒から飛び出すのに約0・5・

・・合わせて、一秒・・・・・・

「それがどうしたのかな？お譲さん。」

「ボクの前での一秒は永遠と同じって言いたいんです」

周りから甲高い悲鳴が上がった。

「そりゃかいそりゃかい、そんな事はどうでもいいのだけれど、待つて居たんだよ、『紅蓮龍』、ふふつ、まさか子供だったとわね、全く分からなかつたよ、それに、赤髪に赤目だつて聞いてたしね、ふふふふつ」

オレガノは恐ろしい笑みを浮かべ、アクロの額に赤くなるほど、銃口を強く、押し付けた。

「痛つ！」

アクロの強気な視線に若干の苛立ちを感じたのか、銃口を捻りながら強く押し付ける。

「ふふ、『紅蓮龍』なんてかつこいい名前だから、男の子だと思ってよ。それなりの、力はあるんだろうね？じゃないと、ぜんつぜん楽しくないじゃないか、あとその、反抗的な態度はただ相手を怒らせるだけだよ？」

アクロはオレガノの、恐ろしい笑みに喉を引き攣らせた、オレガノに氣付かれぬ様にこつそりと《血染ノ剣》を取り出し、勢いをつけて、オレガノの喉笛を貫いた。

掌に、皮膚を突き破る感触と、肉を搔き分ける感触が残る。だが、オレガノは喉を貫かれたにも拘らず、アクロの額に銃口を押し付けたまま、笑い続けている。

「それだけかい『紅蓮龍』？」

まるで化け物の様に。

「くそがつ、シェンツ！」

アクロは眉間の皺を一層深くしながら、シェンの名を呟ぶよつと言つた。

シェンはオレガノの頭上に居た。

シェンの両手には、『聖海ノ爪』が握りこまれている。

「戦争しようぜ？おっさん！！」

シェンは両腕を大きく広げ、オレガノの頭を爪で引き裂いた。

血が飛び散り、アクロの白髪とドレスを鮮血で染上げる。

アクロの足元に首から上の無い、オレガノの骸が落ちていた。アクロは見下すような目つきで、オレガノの骸を、踵の高いパンプスで踏みつけた。

そう楽しそうに言つたのは、オレガノ。  
殺したはずのオレガノ。

「アクロセシHだね。」  
「え、何だ？」  
「なんでー?」

足元の死体はオレガノのもののはず。なのに。

「だから言つただろ？ クローンだつて！」

ケーリンとは、同一の起源を所有し、それに均一な遺伝子情報を持つ、細胞、核酸、固体の集団のこと。つまり、まったく同じもの。偽者だけど、本物。

いだからね。

「でも、貴方はボクを騙した、これは立派な嘘だ。」

「騙したんじやない、勝手に騙されたんだ、私が本物ですってクロ  
髪、赤目、つてのは、髪を血で赤く染めた君の事だつたんだね」

黙れ、酵素の無駄だ」

「アクロ・・・」

ショーンがアクリに近づき、耳元で小さく囁くように言った。

「あいつの血の匂い、あの兵隊の匂いと似てる」

「兵隊？」

「あの紙で指切つた、金髪の方」

シェンは言った、少し楽しそうに。

アクロは銃口を押し付けられ、赤く鬱血した額の丸い痕をさすつた。  
鮮血に濡れたドレスを、動きやすい様に、切り裂き、兵隊のところへ駈け出した。

シェンはアクロを追つた。

## 9 紅の血

もつ、そこに居たのは兵士ではなかつた、一国の王子、オレガノ本人。

「あれ？何で気がついたのかな？おかしいなあ、あのクローナンは完璧なはずなんだけど？」

「血の匂いですよ、」

「血は盲点だつたかな、まあいいや、君達の事を、殺すまでっ！」

オレガノは、長い口笛を吹いた。

ピイー————。

すると、オレガノの後方から沢山の屈強な男達が現れた。中には、手を4つあつたり、足が無く這うように向かつてくる者も居た。女性が一人混ざつている・・・ゼニアだ。

「・・・これも、クローンですか？」

アクロは顔を顰め、オレガノを睨み付けた。シェンはその光景を見て呆けている。

「ああ、そうだよ？失敗作も混ざつてるけど、皆強い子達だし、それに皆、従順なんだよ、洗礼されてるしね。」

オレガノは楽しそうに言つて、失敗作の頭に手をやり、優しく撫でた。失敗作は指の無い手足をぶら下げ、汚らしく涎をまき散らしながら笑つた様にアクロには見えた。

「正真正銘の嘘吐きですね、この詐欺師ペテンがつ！」

「黙れ、小娘がつ！殺れ！！」

オレガノは突然激昂し、クローン達に命を下した。

「そんな、下等生物共に私が倒されると思うのならば、貴方の頭の中には脳味噌が無いんじやないんですか？」

アクロはオレガノに激しい呻りをかけた。

オレガノはそれを、クローン達の攻撃で答えた。

アクロはそんなもの気にせずに突き進む。

アクロの前をシェンが掃除するかのように、クローン達を切り刻んでいく。

青い鍵爪が赤に染まつていく、アクロの赤に。

「アクロ、オレガノだけを狙え！」

「分かつてるとよつ！」

アクロは脅威の跳躍で、オレガノの懷に降り立つた。

アクロはオレガノの心臓に『血染ノ剣』を宛がつた。

オレガノの顔から怒りのマスクが剥がれ、恐怖が張り付いた。

「どうしたんですか？さつきは元気に喰いてたのに

「つ・・・」

「殺されたくなれば、答えなさい・・・どうして、ボク等を殺そうとしたんですか？」

アクロの表情には、いつもの無機質なものではなかつた、無情な無表情。冷え切つた仮面。

「君達が無茶を言つから・・・」

「何が無茶だ・・・貴方のクローンでも使えば、幾らでもできるじやないかっ！」

アクロは剣の切つ先を食い込ませた、オレガノの皮膚から血が滲む。

「ひつ、あつあつ、アルマン様が・・・」

「アルマン？・・・アルマン・キューブ・リナリアか？」

「そつそうです！アルマン様がもし、紅蓮龍様を殺せば、千人の有能な兵とクローン技術の研究費用を出してくれると・・・」

「クソ親父が・・・いつか、あの腐れた脳味噌を野良犬にくれてやる・・・」

「ぐつ紅蓮龍様・・・？」

「貴方は、アルマンに雇われたわけ？」

「はつはい！だから私は何も悪くないはずなんですよ！」

「・・・ゼニアさんも混ざつていた様だけどなぜですか？」

「本物の動物も人間もこの国にはおりません！」

「どうしたこと？」

「私が元居た国で、私はクローンの技術を開発して居りました。そこで、クローンだけで国を造ったのです・・・」

私が元居た国で、私はク  
で、クローリンゴナで国を

•

「そうですか、で、ゼニアさんも貴方の自由だと・・・クローンとは言え、心のあるものを踏みにじつているんですね？」

「クローンに心などありませんっ！」

— そ う で す か · · ·

アクロの瞳には呆れと怒りが渦を巻いていた。

いやたおおおおああああああああ

アクリは本日一度田の血飛沫を浴び、より深い赤に染まつた。

アクロ達は逃げるよつて国を立ち去つた。

国内はオレガノの造つたクローン達だけ。

アクロ達の居場所などあるはずもなく。

アクロは帰りにいろんな店から甘味を強奪していた。

そのアクロは今、缶に詰められたステイックパイを頬張り続ける。

「アクロちゃん！ 太るから食べるの止めるですぅ？」

「運動したし、頭が疲れてるから、ブドウ糖を摂取してるんです」

「ああ言えば、こう言つですぅ」

「何か言いましたか？ ベルガモットさん」

「ああもおータメ口でいいつて言ひてるですー感じ悪いですねえ、もおー！」

ジャスミンは子供が、駄々をこねる様に言つたが、楽しそうだった。アクロはムスツとしたままパイを食べ続けている。

「なあアクロオ、メタボリックって知つてるか？」

シェンが茶化すように言つた。

「黙れ、酸素の無駄だ！」

「ひでえ、つうか、それあのオレガノとか言つあつさんにも言つた台詞だらうが！ オレはあのおつさんと同列かよー！」

「それ以下だよ」

「以下かよー！」

「でも今回の活躍で肩から塵に格上げだよ」

「どつちが下か分かんねえよー！」

「『ミの上は、『キ リだよ？』

「それは肩より下だと思うぞ！..」

シェンの叫びは、野太いエンジン音に搔き消された。オープンカーは紅い夕日に向かって走っていた。

E  
N  
D

## 10 紅の夕焼け（後書き）

終わつたあー！！

一気に投稿つかりたww

私がまだ子供だった頃に書いたものなので、最後は雑に終わりました。  
(土下座  
すみません。

誤字脱字あり次第コメに乗つけてくださいwww

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9315s/>

---

アクロ・キュープ

2011年5月5日15時17分発行